

オーディオ実験室収載

Brooklyn DAC+の活用(7)

—DSD 録音(2)—

1. はじめに

前報(6)に引き続き、DA-3000 により DSD 録音を行います。Brooklyn DAC+の導入結果を記録するため、今回、MQA-CD からの DSD 録音を実施します。

2. Brooklyn DAC+を使用した録音と試聴方法

録音の経路は次のとおりです。

MQA-CD 盤からの DSD 録音は次のとおりです。

CD ドライブ→fidata FIDATA HFAS1-S10→Brooklyn DAC+
→P&G フェーダー→TASCAM DA-3000

fidata 収納 MQA-CD のリッピング WAV からの DSD 録音は次のとおりです。

fidata FIDATA HFAS1-S10→Brooklyn DAC+
→P&G フェーダー→TASCAM DA-3000

なお、Brooklyn DAC+には ABS-777 からの 44.1KHz のクロックを DA-3000 経由で入力します。

Brooklyn DAC+の入力は、USB に設定し、Brooklyn DAC+の電源、アース、ケーブル、アクセサリー類は、前報(3)の通りとします。

録音は DA-3000 の設定を 5.6MHzDSF に設定し、GPS-777 から 44.1KHz のクロックを入力しています。

再生は、録音音源を fidata にコピーし、fidata から USB 経由で Brooklyn DAC+に送り込んで再生します。

使用したソースは、オーディオ資料室の DSD 録音使用盤に掲載しています。

3. Brooklyn DAC+の試聴結果元の

MQA-CD 盤からの録音と MQA-CD のリッピング WAV からの録音を比較しますと、MQA-CD 盤からの録音より、MQA-CD のリッピング WAV からの録音の方が、若干滑らかになっていますが、クオリティ的にはさほど大きな差はありません。

MQA-CD のリッピング WAV からの録音と元の MQA-CD のリッピング WAV の MQA 再生と比べてみると、DSD 録音は、元音源の MQA 再生の雰囲気をよく受け継いでおり、ほとんど音質の劣化はありません。

なお、録音開始当初、MQA 再生のランプは点くのですが、表示が 44.1KHz となり、352.8KHz24bit とならない状態がありました。初期化の RESTORE 処理でも治らず、

いったん電源を完全に落としてから初期化を行いますと、正常な 352.8KHz24bit の表示となりました。これら表示の異なる録音の音質を比べてみると、差がないようなので、表示が正常でなくとも MQA のランプが点灯していれば、デコードは行われているようです。

4. まとめ

MQA-CD 盤もしくは MQA-CD のリッピング WAV とも、元の MQA の音質を捉えた DSD 録音が可能でした。MQA のデコード機能を持たないが、DSD の再生が可能なシステムには、この DSD 録音音源で元の MQA の音を楽しんでもらえます。

以上